

★ 操 作 方 法 ★

ページの上でクリックすると次のページを表示します。右クリックすると前のページに戻ります。

※ Macintosh で、マウスに右クリックの設定をしていない方は、キーボードの「control」キーを押しながらマウスをクリックすると前のページに戻ります。

※ iPad では、上下スクロールでご覧いただけます。

すずお泰樹



すずお泰樹 プロフィール
1951年2月北海道で生まれる。小学校時代は歌志内市の炭鉱町で育つ。閉山後苫小牧市に移転、中高を過ごす。卒業後上京、カメラ製造会社、機械カタログデザイン会社を経て1974年フリーになる。同時期「あそびの学校」に参画。子ども達に伝承あそび・手づくり工作等を伝える活動始める。1976年山上たつひこ氏のアシスタントになる。

2年後独立。1980年少年キング増刊号「少年ポピー」にてデビュー。その後「コロコロコミック」「1000てんコミック」「朝日小学生新聞」「わんぱくコミック」等に作品を発表。1988年より「テレビランド」廃刊までの8年間「組み立て付録」の構成を続ける。廃刊後北海道へ戻り、3年前再び上京。山下さんの薦めで「新つれづれ草」に作品を描く運びとなる。



北海道の炭坑町で育つ
山の中で自然に囲まれながら
遊んでいました

僕の姉や兄はね、帰国子女なんですよ(笑)。

うちの一家は戦後、樺太から引き揚げてきたんです。終戦は1945年だったけど、実際に引き揚げてきたのは48年。僕は8人きょうだいの一番下でね。きょうだいの構成は、このあいだ8歳で亡くなった長女と、いま82歳の長男と8歳の次男。その下に兄が二人いたんだけど亡くなって、7歳の姉がもう一人。そしてすぐ上の兄貴が48年生まれ。引き揚げる直前に生まれたらしいです。末っ子の僕は、函館のちよつと北の方にある森町(駅弁イカメシで有名)というところで生まれました。

うちの親父は船大工でね。でもそれだけじゃ食えないから、炭坑のある歌志内に行ったんで

す。炭坑で働く人が住む長屋（六軒長屋）があるでしょう、あれを建てる仕事があるからみんな来いって親父が。それで僕らも歌志内に引越して。小学校4年のときでした。校舎もね、一軒長屋をぶち抜いて作ったような感じで、生徒も少なくて先生もろくにいなかった。（4名位）

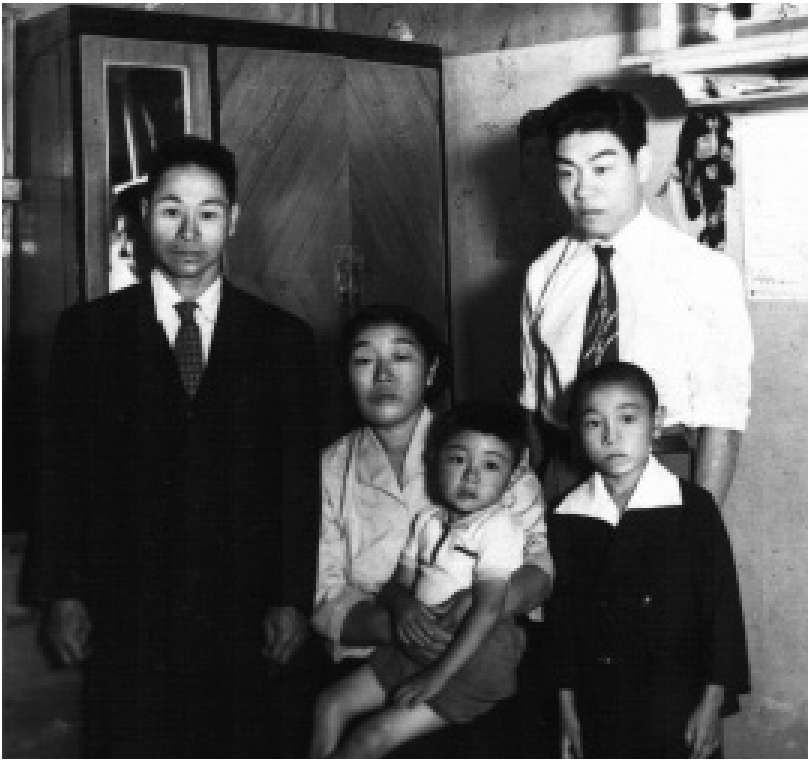
まだテレビがそんなに普及していない時代だから娯楽もそんなになくてね。何をしていたかというと、山ぶどうとかクルミを取ったり、あとコクワっていうキウイに似たものがあって、ちゃんと熟れていればおいしいんだけど、熟れていないとけっこう渋くてね。そのときは米ぬかに入れておく。何日かするとちょうどいい具合になるんですよ。それからアカ線って知ってる？ 銅線のことなんだけど、炭坑だとダイナマイトを使うから、銅線があちこちに落ちてい

てね。集めて廃品回収屋に持って行くと、けっこういい小遣いになった。

そんなに裕福な家庭じゃなかったから、マンガも滅多に買ってもらえなかった。山の上の炭坑町だったから、本屋もないし、下の町まで歩くとい時間ぐらいかかるんですよ。最初に読んだ貸本マンガは『墓場の鬼太郎』かな。兄貴たちが札幌に就職していたもんだから、泊まりに行ったときに近くの貸本屋で借りて見た。

それから、たまたま他のところから転校してきた高橋健二君っていう子がね、ものすごく絵がうまかったんですよ。工作も上手でね。「X—15」って戦闘機知らない？ 真っ黒い戦闘機で、あれを高橋君が画用紙でもものすごくリアルに作るんですよ。絵心もあつたけど造形力もすごかった。そういうのを見て触発されたというか。今思うと、その子がいなかったら、僕は

マンガ家になっていかなかったかもしれない。まあ親父は大工だったから手先の器用さはちよつと受け継いだところもあるんだろうけど。



母親に抱かれているのがすずおさん



中学からマンガを描き始める
途中からデザインの方に
走ってしまいました

歌志内には小学校6年までいました。炭坑が閉山になったので、結局、札幌の兄貴のところ
に家族で行きました。親父だけはあちこち出稼
ぎに行ってたもんだから、札幌には来なかつ
た。母子家庭みたいなもんですよ。でも札幌に
住んでたのは1年だけ。親父の親方に当たる人
が苦小牧に仕事があるから来いと言われて、そ
れでまた一家で苦小牧に移りました。

転校した苦小牧の中学では、クラスに必ず一
人か二人、マンガを描く奴がいましたね。ちよ
うど「少年マガジン」とか「少年サンデー」を
読み始めた頃で。森田拳次さんの『丸出だめ
夫』が流行ってた。中学3年のクラスでディズ
ニーの絵がうまい子がいてね。ミッキーマウス

とかドナルドダックとか。そんな絵を描いていると、女の子が寄ってくるんですよ。それを見て、負けてらんないと。それで僕が真似をしたのは牧美也子さんのマンガに出てくる犬。大きな目をきらきらさせた犬なんですけど、それを描いたら、違うクラスの女の子から「すずおくん、描いてくれない？」って。今思うと、あれが人生で一番のモテ期だったかもしれない（笑）。

その頃、自作でマンガの本を作りました。万年筆で直に画用紙に描いて。下書きもなにもせず。大したストーリーはないんですけどね。ホッチキスで閉じて何冊か作ったんですよ。絵柄を真似したのは藤子不二雄の我孫子さんの方。当時、我孫子さんは「少年キング」で『フータくん』というマンガを描いていて、けっこうブラックなところに惹かれましたね。

『黒ベエ』とか『怪物くん』も好きだったな。

マンガを描くときに下書きをするようになったのは、石森章太郎さんの「マンガ家入門」の影響です。ちょうど僕が工業高校に入った頃ですね。でも、デザインの方に走っちゃったんです。ほら、ちょうど東京オリンピックがあったから、亀倉雄策さんとか、永井一正さん、それから横尾忠則さんといった人たちが出てきて、グラフィックブームみたいになったことがありましたよね。だからアルバイトして貯めたお金で、通信教育でレタリングとかデザインの勉強をしていました。アルバイトは北海道だとけっこうあつてね。ゴルフのキャディーとか、苦小牧には製紙工場があつたから、煙突の掃除のバイトとか、あと工業高校生だから、機械のメンテナンスみたいな仕事もありました。旋盤とかね。



集団就職で東京に
絵本作家を目指しつつ
子どもに遊びを伝える仕事へ

高校を卒業したのが1969年。集団就職で東京に来たんです。足立区にあったカメラ会社でフライス盤の仕事をしたんですよ。でもちよつと違うなと思って、広告でカタログデザインの会社があるのを知って、高校のときに描

いていたレタリングを持って行きました。飛び込みだったけど、すぐ採用された。文京区白山にある小さな会社でしたけどね。そこに入って、デザインとか版下の仕事をやりました。工作機械のパンフレットとかを作っていたんだけど、晴海で見本市をやっていたので、あのあたりはよく行ってましたね。当時は白山通りにまだ都電が走っていました。

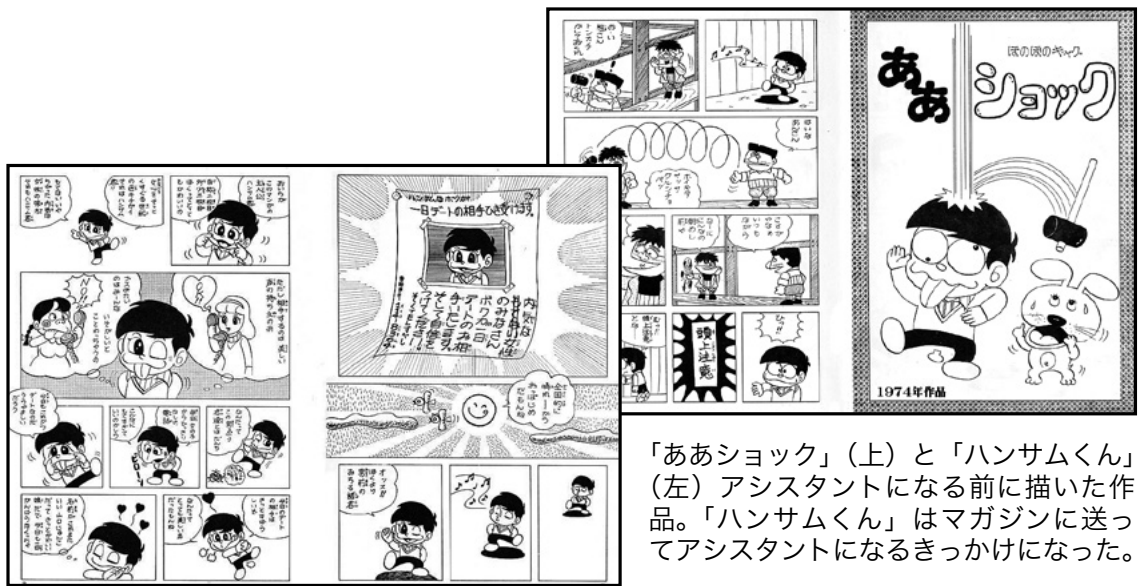


「お目でか君」は中学生のころ下書き無しで描いた私立探偵物、ホチキス留めで5冊作った。



高校時代に描いた動物マンガ「ヘソのあるカエル」「フチの星」





「ああショック」(上)と「ハンサムくん」(左) アシスタントになる前に描いた作品。「ハンサムくん」はマガジンに送ってアシスタントになるきっかけになった。

その会社に
は4年間いた
けど、何を勘
違いしたか、
フリーになり
たいと思いつ
めて(笑)。実
は、僕、マン
ガというより
は絵本を描き
たいと思つて
いたんです
よ。なぜ絵本
かというと、
永島慎二さん
に『旅人く
ん』という作

品があつて、絵本風なマンガというか、ああい
うものをやりたいと思つていたんです。すばる
書房という出版社から「月刊絵本」という雑誌
が出ていて、そこで絵本学校があるという告知
を見て、応募したんです。田島征三さんと赤
羽末吉さんといった有名絵本作家が主宰してい
るといので、暇だから行ってみようと。そこ
に手伝いに来ていた講師の一人が、子どもに遊
びを伝えたいという話をしていて。そういえば
今の子どもたちつて遊びを知ってるのかなと。
僕は山育ちですからね。山で培ったいろんな遊
びを伝えていこうという話になって、「あそび
の学校」というものが始まったんです。児童館
などに呼ばれて手作り工作を伝え始めました。
絵本を描くにあたって、子どものことを知っ
ておいたほうがいいかなと思つたのもあります
ね。伝承おもちゃづくりから始まって、紙の工

作も始めました。

子どもからすると、絵本作家の卵とか、マンガ家とか、そういう人が講師に来るわけだからすごく魅力的なんですよ。子どもたちは生き生きしてましたねえ。僕らもガキ大将みたいな感じで一緒に遊んでいたという感覚だったかな。それがマスコミに取り上げられたりしましたよ。愛川欽也さんがやっていた「HPM」に呼ばれて、竹で作ったおもちゃを紹介したりとか。あんな深夜のお色気番組にねえ。子ども見てないのに（笑）。



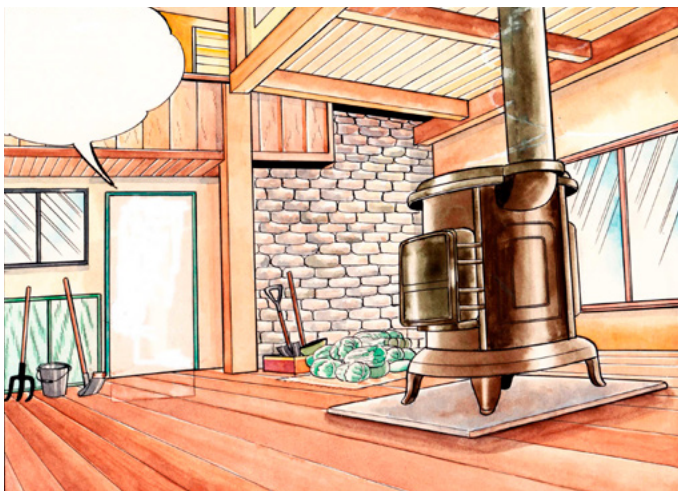
マンガ家デビューは29歳。
山上たつひこさんのアシスタントで
鍛えられました

絵本作家を目指してはいたんだけど、並行してマンガも描いてました。どちらかというところのぼのギャグマンガが主体だね。リアルな背景

は苦手だった（笑）。25歳のときに、描いていたマンガを「少年マガジン」に送ったんです。そしたら「山上たつひこ先生がアシスタントを探しているからやらない？」と言われて。25歳にもなつてアシスタントをやるのは抵抗があったんだけど、行ったら採用されてね。山上さんのマンガって内容はギャグだけど、劇画じゃないですか。だから背景は描けませんって言ったんだけど、「いいよいいよ」って（笑）。どうして自分が採用されたかというところ、僕、絵本をやってたでしょう。で、山上さんは当時、4色原稿が多かったんです。だから着色ができるアシスタントが欲しかったみたい。

当時、『がきデカ』が全盛で、一番忙しいときだったと思います。他にも月刊の連載や読み切りがあったから、とにかく自分の時間なんかなかったですよ。先生が寝るっていうまでこつ

アシスタント時代にボツになった背景画



ちは寝られないんだから。何度も描き直しさせられるし、あれでけっこう根性は鍛えられたかなあ。当時は板橋区の蓮根に住んでいて、保谷の山上さんのところに通っていたんだけど、今から終電で来いって言われてね。で行ったら仮眠所で寝てろと。だったら明日来てもいいんじゃないのって(笑)。そういうのが何回もありましたよ。それでも、山上さんのところに来て、リアルな絵というか劇画チックな絵も勉強できたし、そういう意味では良かったと思います。

山上さんはやっぱり天才かなあ。なんか違うんだよね、感覚が。『がきデカ』って見た目はえげつない下ネタマンガだと思われているけど、意外と社会のことを風刺したりしているんですよ。

結局山上さんのところには2年間いたのか



アシスタントを終えて、持ち込みをしていた頃の作品。「異次元ボーイタイムくん」のキャラを怪物くん風にした物がデビュー作になった。

な。最初の1年はフルに働いていたけど、2年目からはアシスタントは半月交代制になったので、自分のマンガが描けるようになったんです。それで山上さんのところを辞めた頃からいろんな編集部を持ち込みを始めました。29歳のときに「少年キング」の編集長だった人が、持ち込んだマンガを描き直したらいいんじゃないのと言って、それで描き直したのが『異次元ボーイタイムくん』。これがデビュー作です。掲載されたのは「少年ポピー」という雑誌で、

昔のちばてつやさんの『ハリスの旋風』とか、ジョージ秋山さんの『パットマンX』とか、あいう古いマンガを再録して、その中に新人の描き下ろしを入れていたんですよ。だから『ハリスの旋風』と一緒に載つてたという(笑)。「少年ポピー」は2年ぐらしか持たなかったんじゃないかな。そのあとは小学館の「コロコロコミック」に持ち込みしたんだけど、なかなか使ってくれないので、双葉社の「100てんコミック」で『発明そん太くん』を始めました。それが初連載。でも「100てんコミック」が休刊になったのでまた仕事がなくなつて。知りに合いに「朝日小学生新聞」を紹介しても

らって、『とんてんカン太の大発明』というマンガを描いたりしました。

そのあと徳間書店の「わんぱくコミック」でジオラマのカットを描いてほしいと頼まれたり、読み切りマンガを描くようになりました。そのあとファミコンブームがやってきて、必勝マンガを描いたり。いちばん続いたのは『ポケットザウルス』というゲームのマンガ。原作者はいたんだけど、原作原稿とか何ももらえなかったから好き勝手に描きましたね。ダジャレ入れたりしてね。子どもってけっこうダジャレは好きだからさ。



北海道に戻り、再び東京へ
子どもだけでなく老人向けに
仕事を伝えていきたい

89年に「わんぱくコミック」が休刊したあと、「テレビランド」で組み立て付録を作つて

くれる人を探しているというので、紹介されて。そこで休刊（96年）になるまでずっと付録を作っていました。A4判ぐらいの大きさの紙にヒーローものの武器とか乗り物とかの図面を描いて、型抜きをする版を作り、なおかつ作り方のマンガも描きましたね。その間にもたまにマンガの仕事が来たりしていたので、何とかやっていけたというか。

「テレビランド」が休刊になったときに、北海道に帰ることにしました。お袋も弱っていたし、死に水だけは取つてあげようと思つてね。で帰つたはいいけどなかなか死なない（笑）。結局それから10年生きていましたから。苦小牧に帰つてからは、工作の本が中心になりました。たまに出前講師で浦河の公民館に呼ばれたりしたけど、東京と比べると、予算がそうだったところにあまり使われないんですよ。だから北海

道では本の印税でなんとか暮らしていたという感じですか。

東京に戻ってきたのは3年前です。お袋が亡くなったというのもあるし、もうちょっと本腰を入れて営業しようかなと。これだけ工作の本を作ってきたわけだからね。また出前講師をやっているんですけど、今の子どもたちは刃物を使ったことのない子が多いんですよ。母親にあたる世代の人たちも40代ぐらいだから、その人たちも刃物を使った経験がないので、怪我をしたらどうするんだという意見があったりする。価値観が変わっているのかな。

だから今は子どもだけに目を向けなくて、老人ホームとか介護施設とか、お年寄りに伝えるのもいいかなと思っています。手先の訓練になるし、ボケ防止にもなりますよ、って営業しようかなと思っています。

北海道には年に一回は帰ります。親父とお袋の墓参りも兼ねてね。お袋は、きょうだいの中でなんでお前だけマンガを描くようになったのかわからない、「突然変異」って言うてました。確かに兄弟とか親戚とか、絵を描くようなのは一人もいないんだよね。僕だけなんです。だから兄貴たちには、好きなことやれていいなと言われちゃう(笑)。

「新つれづれ草」は北海道にいたときにネットで知りました。みなさん頑張っているんだなと思つて注文したのがきっかけです。東京に戻ったとき、2012年のコミケに顔を出したら、編集担当の山下さんに「描きませんか?」と言われたので「描きましょう」と(笑)。今描いている『はつちやきロボケン』は、僕の実生活をモデルにしています。独身の売れないマンガ家の実態をね(笑)。山下さんの本じゃなきゃでき

ないことを描き続けたいと思っています。

■インタビューを終えて

漫画家の数だけその漫画家の人生があります。そう断言できるのは、これまで「新つれづれ草」に關係する漫画家さんを10人近くインタビューをしてきて、誰一人として、似た人生を歩んでいる人がいなかったからです。漫画はもちろん、雑誌付録、工作の本で才能を發揮したずずおさんの人生もまた、唯一無二のものだと思います。お話が無類に面白かっただけでなく、軽やかで明るい人柄も素敵でした。

文・中島泰司

2015年4月6日

東京中野駅近くの喫茶店にて

